

## 第25回 奈良県河川整備委員会 議事概要

1. 日 時：平成16年11月8日（月）14：00～16：30
2. 場 所：奈良県社会福祉総合センター 5F 研修室B・C
3. 出席者：委員（敬称略）池淵周一、澤井健二、木村優、御勢久右衛門、荻野芳彦、  
近江昌司、榊原和彦、伊藤章子（順不同・敬称略）  
奈良県 竹島河川課長 ほか

### 4. 議 事

- (1) 第24回奈良県河川整備委員会の議事概要の確認
  - ・第24回委員会議事概要の修正事項について了承を得た。
- (2) 地域との連携の課題
- (3) その他

### 【主な意見】

- ・河川への関心を高めるには、歴史散歩や食文化に関わる催しなど、大人も楽しめるイベント企画があると、市民も参加しやすいのではないか。
- ・住民参加のシステムづくりには、組織が非常に大事だと思う。また、行政と市民の橋渡しという意味でも、大学の役割は非常に大きいのではないか。
- ・実施段階での住民参加は、地域住民の意見を聴くだけでなく、一緒に行動することが重要である。その内容には、清掃だけでなく、生物や水質のモニタリング調査、土砂堆積箇所の調査などを入れてもよい。
- ・情報誌の編集に住民が参加するなど、住民に直接関わってもらうことが重要である。
- ・川の通信簿では、住民に評価してもらうだけでなく、点検項目の検討に参加してもらうのがよい。場合によっては、地域性が出るような自由項目があってもよい。
- ・ボランティア・リバーサポート事業で、土砂の掘削や砂州づくりに取り組めば、生き物との関連ができておもしろい。
- ・安全、安心という治水面での住民の参画では、後退したコミュニティーをどう再生するかが課題。ハザードマップなど、きめ細かいものをつくる時は、市町村単位で相当詰めていく必要があり、施行も難しい。そういう内容がさらに付加されるべき。
- ・河川管理者である奈良県と市町村との関係が、われわれ外部にいるものから見ると分かりにくい。
- ・曾我葛城圏域の川の特徴が見えにくい。曾我葛城圏域というのは、ここがポイントなんだ、ここに住民の力を結集したいんだという絞り込みの作業をしていかないといけない。委員会も重点を絞り込む努力をしないとイケないのではないか。
- ・住民との連携方法については、住民から知恵をもらうことから始めないと、役所がいくらがんばって書いても、なかなか住民との距離は縮まらない。
- ・地域に愛される川とはどんな川なのかということが分かっていない。たとえば、裸足で入るぐらいの川をつくろう。そのためには、裸足で入るような道をつくるなどといった具体

的な形で作っていくことが大事ではないか。

- ・五條市内の吉野川では小学校の生徒が月に一度、袋を持ってゴミ拾いに来ている。こうした姿を大人が見ていれば、何とかしていこうという気持ちになるだろう。そういうことが溜まっていけば地域に愛される川になるだろう。
- ・環境学習で川に子どもたちを連れて行ったとき、子どもたちは喜んで靴のまま川に入っていたが、保護者は誰も川に入らなかった。誰が自然から子どもを遠のけたのかということのを反省しないといけない。
- ・自治会で「川をきれいにしましょう」という立て札を至るところに立てたら誰もごみを捨てなくなった。大人がまず見本を示し、子どもたちの純真な気持ちを育ててやるのが大切ではないか。
- ・県が行っている仕事について知ろうとしないし、知る機会が少ない。県庁の県民ホールに行っても、そういうものが徹底していない。何か考えないといけないのではないか。
- ・河川管理行政になぜ地域との連携や市民参加が必要であるかが余り伝わっていない。今日の資料には書かれていないが、非常に重要なのは、平成9年の河川法改正の中で「環境」を目的に入れたということ。それにしただがって住民参加や地域連携が必要になったということ。そのことを周知させることが河川管理者の責務だと感じている。
- ・河川整備や管理には住民参加や地域のサポートがないと進まないから、何とか進めるために市町村への委譲などの法的な整備が必要ではないかと思う。実際に地域におろして任せるとすれば住民は必然的に参加するだろう。
- ・行政のあり方や目指すものが変わっているが、変わった方向にはまだ入っていないように思う。なぜ、行政のあり方を変えていかなければいけないかということを知らせて理解していただくことが必要。国が出すそういったシグナルを住民に理解してもらうために、県はコーディネーター的な役割を担うべきであり、そのためにも法整備が必要。
- ・住民意見を聴くというのは形式的に聴いているに過ぎない。結局、計画をつくるのは河川管理者ということになっている。どこまで本気で“参加”ということを考えているのか疑問。河川整備計画は、いきなり実施になるようなものではないもの。優先順位や実際具体的にどうするかという最低限2段階ぐらいの計画が必要。それらを住民参加で本気でやるのか、河川管理者が全部つくっていくのかが判りにくい。
- ・整備計画と維持管理計画、あるいは維持管理・利用計画、これは別にすべき。何をどこまで「住民参加」ということでやるのかを明確にすべき。
- ・「平常時」と「非常時」は全く違う。平常時については、河川管理者が中心となり計画を立てて実施するのではなく、住民の参加が必要となるのではないか。一方、非常時の場合については河川管理者が完全にやってもらわないと市民、国民、あるいは住民としては困る。

#### 【寝屋川水系における地域連携による河川整備の事例紹介】

澤井委員より寝屋川水系における地域連携による河川整備の事例を OHP で紹介。

#### 【奈良らしい堤防づくり、樹木の整備の紹介】

御勢委員より、堤防・樹木整備について、スライドにより紹介。

(参考資料 1)

【寝屋川水系における地域連携による河川整備の事例紹介 (要旨)】 澤井委員

- ・今から 3 年前に政府の都市環境プロジェクトの一環として、寝屋川流域水循環系再生構想検討委員会がつけられた。それを機会に、住民の活動をもう少し組織化したいということで私がコーディネーターとなり、きれいで豊かな水を考える懇談会というのが組織された。その組織は構想検討委員会と並行していたので、2 年間で終わってしまったが、せっかく芽生えた組織を絶やすのは惜しいので、私が提案して住民から立ち上げるネットワーク組織をつくらうということになった。現在、行政としては大阪府の河川室が中心となり、市民側の窓口を私の大学で受け持っている。
- ・少なくとも年に 1 回程度は情報交換をする懇談会を行うこと、それぞれの市民団体が企画するイベントに流域全体から参加するというのを毎年持ち回りで行うことを提案し、昨年は手漕ぎの船に乗って寝屋川を大阪市から寝屋川市まで遡るというイベントを企画した。今年は、懇談会を開催することができなかったが、来年からは、寝屋川流域総合治水対策協議会の PR イベントに総合治水+環境フォーラムというように名称変更して開催することになっている。
- ・これらをサポートする組織として、大学間のネットワークをつくってみたらということで、他の大学にも呼びかけて、学生がスタッフ的な役割を担おうということを行っている。
- ・それらとは別に寝屋川市役所と一体となって動いている活動もある。四年前に寝屋川市が市政 50 周年を記念して寝屋川水辺再生ワークショップを企画し、30 人の募集に対して 60 名の応募があり、全員が採用された。ワークショップでは市民に聴いてみると、魅力的なところや実現しそうな部分に議論が集中した。その第一が寝屋川の駅前だった。そこは去年までは誰も近づけないような水辺だったが、ここに橋があったらとか、階段があったらという議論をして、それを市がコンサルタントに発注してイメージ図に仕上げた。来年三月に完成する予定で整備が行われている。
- ・いろいろな活動を進めるうえで、それぞれ地域がばらばらにやっているのでは効果が薄い。どこでどういうことをやっているということをお互いに情報交換をして、同じことをやるのではなく、私たちがこういう特徴を持っているから応援に行きましょう、そのかわり私たちがやる時には応援に来て下さいという形で情報交換していくような組織作りが大事だと思う。そのためには、ちょっと強引であっても定期的にイベントを開くというのが非常に効果的ではないかと思っている。

(参考資料2)

【奈良らしい堤防づくり、樹木の整備の紹介（要旨）】 御勢委員

- ・河川の整備が進むにつれて瀬と淵が減少し、日本の川が溝のようになって生物がいなくなった。生物が豊かになるようにするにはどうしたらいいかということを思いながら方々で写した写真をスライドで紹介したい。
- ・吉野川で水辺の楽校をつくる時に川辺と堤防に何を植えたらよいかというアンケートをとった結果98%が桜という答だった。桜もいいと思うが、私は好きではない。春の4～5日はきれいだが、あとは暗くなるし、たくさん害虫が発生するという欠点もある。
- ・ここにセイヨウカラシナ（春）がある。堤防に黄色い花が咲いていると大体水がきたないと考えて良い。一般に黄色い花は窒素に敏感だからである。セイトカアワダチソウやマツヨイグサ（夏）などもそう。
- ・五條市街の下水が流れてくるところに白い鳥（コサギ）がいる。この鳥は、本来田んぼに生息するものだが、最近川に来ている。川が田んぼのようになっているということだ。白い鳥がいるところは大体水が汚れている。
- ・五條の町並み伝承館が本年春に改修できたが、この川岸に何を植えるかアンケートをとると90数%が桜だった。私は柳を植えなさいといって、柳2本とシダレ桜2本を植えた。どちらが良いか、これから50年間見ていこうということになっている。
- ・ススキによく似たオギという植物は、景観として非常に良いのではないかと。根が張るので少々水が出ても流されない。有機物をよく吸収するので川が非常にきれいになってくるというデータが出ている。
- ・川岸にヤナギ類が生えていると、景観として良い。これが川の土が流れるのを抑える仕事をしている。ネコヤナギもあるが、これもコンクリートを張るより強い。早春は非常にきれい。（飛鳥川の上流域の川岸にたくさんみられる。）
- ・吉野川の川筋を歩いていると、“この道下ると渡し有り”と書かれた石碑がある。これも一つの川の景観、歴史景観だと思う。こういうものがあると感性がくすぐられ川へ行きたくなる（親水性）。
- ・この佐保川にある万葉歌碑には、千鳥とか、かわず（カジカガエル）が鳴いたのに、恋人にそれを聴かさずに返したのは残念ですという歌がある。当時は水が大変きれいだったということがわかる。
- ・竜田川にはナンキンハゼが植わっている。紅葉して案外良いもの。竜田川にはモミジも植わっている。これも竜田川に見合っていて良いのではないかと。